

## 上級学習者のための「読解」のあり方とは

佐尾 ちとせ

### 要 旨

「読解」と一口に言っても、文章を読み味わうことを、そもそもの目的とした授業もあれば、資料として何らかの文章を読むことにより、文化や時事問題を理解し、それについて論じたり、各人の主張を展開させたりすることに主眼が置かれている授業もある。ところが、授業形態や、その授業を通して身につけさせようとする能力は異なっても、総じて、その文章に書かれている事柄、すなわち<情報>を、いかに速く、正確に捉えることができるかが、読解の中心となってきたといえるのではないだろうか。

筆者は、同志社大学留学生別科（以下、同大別科と称する）の上級クラスの「読解1」の授業において、<情報>そのものよりも、情報の<伝え方>を重視する読解の方法を試みた。具体的には、①同じ事柄を複数の新聞社がどのように報じているかを比較する、②同じ事柄について、「事件としての報道」、「社説」、「天声人語」等の「コラム」でどのように書き分けられているかを比較する、という作業を学生に行わせた。こうした作業を通じ、学習者が内容の理解を深めることができたのもさることながら、日本語を再認識し、日本語によって書かれた物の中に新しい興味を発見するきっかけとなり得たことが大きな成果と考えられる。授業において特に力を入れたのは、その文章に用いられている表現の持つ意味、必然性を把握させることである。それによって文章を読む際、どこに着目すべきかが明確になり、初級から、上級に至るまで、数々の文法事項や語彙を学習してきたことの意味づけともなった。このことが、結果的には、日本語学習に対する新たな動機付けともなったと考えている。

## 1. 上級学習者に対する「読解」のあり方を考え直すきっかけ

日本語上級者の捉え方にもよろうが、日本語学習の一環として行われる「読解」の授業において、上級学習者が求めているのは一体何であろうか。母語で書かれた文章を読む能力が十分にある学習者にとって、使用されている言語が母語ではないということが、読解をする上で、何らかの障害となっているのであれば、その障害を克服すること、すなわち日本語そのものに習熟することこそが、突き詰めて考えれば、求められていることなのではないだろうか。私が、このように考えるようになったきっかけは、同大別科の最上級クラスに在籍し、現在は同志社大学の研究科に学ぶ、ある学生の漏らした言葉である。この学生は、「内容を読み解くためのキーワードというのは、しばしば教材に示されているが、筆者の用いた表現のうち、どの表現が筆者の主張を支え、日本語らしい日本語の文章を形成しているのか、それを明らかにしてくれるようなキーワードが示されることはないのではないか」といった感想を述べた。

たしかに、学習暦が長い学生、特に漢字圏出身の学生は、漢字の助けも借りて、文章の中に何が書いてあるかを理解することが、それほど苦ではない。だが、彼らは常に、ほんとうにその読みでよいのか、一体何を読み取ったら読めたといえるのかといった、一種の不安感のようなものを抱えている。それを解消し、確かに読めたという納得のいく読解をするにはどうしたよいのか。試行錯誤の結果たどりついたのは、この節の冒頭に述べたように、後にも先にも追究すべきなのは日本語そのものであるという結論である。

## 2. 従来の上級学習者向け「読解」教材に対する疑問

「読解」用の教材は、数多く開発され、出版されているが、そのうち中上級者を想定した教材を内容的な観点でいくつか分類してみると、以下のようになる。

- ・読解の技術を習得するための教材…『日本語上級読解』『日本語を楽しく読む本・中上級』『中・上級者のための速読の日本語』など
- ・生の新聞記事に触れるための教材…『朝日新聞で日本を読む』『新聞で

学ぶ日本語―読んで話す現代の日本』など

- ・日本事情を理解するための教材…『日本を知る―その暮らし365日―』『日本を知ろう 日本近代化に関わった人々』など
- ・「日本留学試験」等の試験対策のための教材…『読むトレーニング 応用編』など

ところが、生教材そのものを取り上げたものか、生教材を元に書き下ろしたものかなど、内容的には多少異なるものの、多くの教材が目標とするところは、日本語で書かれた文章の中から、いかに正確に、かつ素早く、情報を掴むかという点である。つまり、問題となるのは、書かれている情報、すなわち「何が」書かれているのかということであって、その情報を「いかに」伝えようとしているのかではない。以下に、いくつかの教材の解説を引用する。(引用文中の下線は、佐尾が私に付したものである。以下同様。)

### 『日本語を楽しく読む本・中上級』

#### 6 読解、読解教材についての考え方

(1)読むということは、読み手が、読む目的にしたがって、自分自身の知識を活用しながら、しかもなるべく効率的に、テキストの内容を再構築する活動であること。その点で、スキーム・ストラテジー使用を刺激することが重要である。

(4)読みの学習は、言語的なインプットの一つとして、言語使用の経験を持つという点で重要なものである。また、直接的には、<sup>(ママ)</sup>読みテキストから情報を獲得したりする技術を養うこと、などの役割を持っていること。 (p.4)

(4)の下線部にあるように、「情報を獲得する技術」の養成を謳っている教材は他にもある。そして、それらの中では一様に、(1)の下線部にいう「効率的」な情報収集そして理解が必要なこととされている。そのためには、「自分自身の知識を活用しながらテキストの内容を再構築する」能力を養う必要性が説かれている。これは簡単にいってしまえば、未知の言葉を知っている言葉に置き換えて考えられる能力ということになるだろう。

## 『中・上級者のための速読の日本語』

## 1. このテキストのねらい

目標① 必要な情報や知識だけ，素早くつかみ取れるようになる

(目標についての概説省略)

目標② 普通の日本人の読み方に近い，自然な読解法を身につける

(目標についての概説省略)

(p.8)

## 1. 「このテキストのねらい」(p.8)の補足事項

目標①と②が大切な理由：

文章の読み方には二種類の方法があると考えられます。一つは言語指向の読解，すなわち初・中級の外国語習得に用いられている精読読解法で，新しい語彙や文法を学び，文構造を理解する目的で文を読む読み方。もう一つは母語話者の自然な読み方である内容指向の読解で，その中には熟読（精読）と速読があります。(中略) 上級に進むにしたがって，読みの目的が言語指向から内容指向へと自然に移行していくのが理想ですが，長く言語指向の精読を続けると，上級で広く多くのものを読まなければならない時期にきて，文法や語彙をいちいち分析確認しながらでないと次へ進めないという問題が生じてきます。これは，特定の文法・語彙を導入するために書かれた文章を構文中心で精読するという学習法がもたらした弊害と言えるでしょう。言語指向の精読は，初期の学習段階では不可欠なものですが，多くのものを読んで知識や情報を増やすためには限界があり，ましてやこの方法では楽しんで読むという域にはなかなか到達できません。(後略) (p.170)

この教材には，第一の目標として，「必要な情報や知識だけ」を「つかみ取る」ことが掲げられており，それができるようになることが，上級者としての自然な読解法を身につけることにつながるという考え方が示されている。目標についての補足説明の中で下線を施した部分，中でも「文法や語彙をいちいち分析確認しながらでないと次へ進めない」について述べれば，たしかに学習者の中には，個々の表現にこだわりすぎるあまり，全体を見通すことができないという学生がいることは事実である。ただ，私の指導する上

級レベルの学生、特に、上に感想を引用したような、同大別科の最上級クラスに在籍している学生の間では、全体を理解した上で、尚且つ、「文法や語彙をいちいち分析確認」することを望む声が高い。これは、かれらが「楽しんで読むという域」に自分なりに到達し、さらに日本語そのものの分析を「楽しんで」いるからであると考えられる。彼らの声に云う。「事件そのものなら、インターネットででも何でも、知ることはできる。だが、それを日本語でどう書いてあるのかを知りたいのだ」と。

日本語を学びたいという意欲に燃える学習者にとって、日本語で書かれた文章を読み、そこに用いられている表現に納得することが楽しくないはずはあるまい。学習段階にもよるが、仮に、その文章で扱われているテーマが非常に興味深いものであったとしても、用いられている日本語が幼稚で、既習の表現ばかりであったとしたら、物足りなく感じるであろう。それに対して、テーマがおもしろいに越したことはないが、それ以前に、自分が難解だと感じるような高度な日本語を駆使した文章、言葉を読み解くことで、初めて内容の理解にたどりつくことができるような文章こそが、理解できたときの喜びが深く、読解を楽しむことができるのではないだろうか。

先に引用した教科書が、表現の分析を全面的に否定するものとは考えない。まず、文章全体の大意を汲み取れるようになってほしいという作成意図も十分理解できる。だが、これまで、「読解」の考え方が、あまりにも内容に比重を置き過ぎており、それが、少なくとも同大別科に学ぶ上級レベルの日本語学習者にとっては、物足りなく感じられるものであったのは事実である。

### 3. 同志社大学留学生別科における「読解」の授業の概要

日本語能力は、一般に「読む」、「聞く」、「話す」、「書く」の四技能に区分されるが、授業としては、それぞれに対応した「読解」、「聴解」、「口頭表現」あるいは「会話」、「文章表現」あるいは「作文」といった、いわゆる技能別の科目と、それらを総合的に扱う科目が置かれている場合がある。同大別科では、中級レベル以上のクラスにおいて、技能別科目と並行して、「総合」の科目名の下に、四技能を文字通り総合的に伸展させることを目的とした授業が設置され、相互に補完しあうことにより、学生の日本語力をバランスよ

く向上させることを企図している。

技能別科目としては、「口頭表現」「文章表現」がそれぞれ1科目ずつであるのに対し、「読解」の授業は3科目設定されている。これは、中級以上、特に上級レベルになってくると、書かれたものから得られる情報が圧倒的に多くなり、かつ、日常生活や、言語レベル的にはその延長とも考えられるドラマ等では触れる機会のないような表現が、書かれたものには多く含まれているという考えに立ってのことである（注1）。「読解」の3科目は、取り扱う読み物の内容、身につけさせたい能力などの観点で分けられ、「主として新聞記事の読解などを中心とした、速読、多読能力を育成する授業」、「新聞記事などの読解を基に、そこに取り上げられたことをさらに深く調べたり、クラスで討論したりする発展的な学習につなげる授業」、そして「文学作品をじっくり鑑賞する授業」の3種類となっている。

本稿で報告するのは、2005年度春学期、日本語ⅦBクラスにおいて、新聞記事を速読、多読することを目的とした「読解1」の授業で試みた読解の進め方である。

#### 4. 「読解1」の授業実践

##### 4-1 授業の目的

日本語の授業は、ある意味、特殊な場である。ただ単に、日本語を用いてコミュニケーションするというだけならば、かなりの間違いは無視できるし、言葉の選択の誤り等が原因で意味不明な部分があったとしても、全体の文脈から推測すれば、コミュニケーションが全く成立しないということはありません。だが、授業においては、あくまでも正確さを追求するし、いわゆる硬い表現の習得に努める（注2）。なぜならば、我々一人前の日本人が、親しい者同士の会話の中でそのような表現を用いないからといって、新聞記事に出てくる言葉を知らないわけではなく、いざというときには、硬い、高度な表現を駆使してコミュニケーションを図ることが必要となってくるからだ。

前節で紹介した読解の教材の中で、「母語話者の自然な読み方は内容指向の読解である」ということが述べられていた（『中・上級者のための速読の日本語』）。母語話者が、「自然に」「内容指向の読解」行うことができるのは、それを可

能にする十分な言語的知識の支えがあるからにはほかならない。一方、学習者にはそのような言語的知識が不十分であり、それを補っていく必要がある。つまり、日本人ならば、「何となく」筆者の言いたいことはこういうことだという見当がつけられても、学習者に対して「何となく」の部分曖昧にしたままでは、文章によって理解できるものとそうでないものが出てしまい、自信をもって文章を読みすすめて行くことができなくなる。

そこで、この授業では、事柄の伝え方に注目し、たとえば筆者の主張を読み取ろうとするのであれば、必ず根拠を表現に求め、どの表現からその主張が明らかになるのかということを追付けていくことにした。日本の高校生などが国語の時間にやるように、「ここに、このように書かれているから、このことが言える」と言葉をたどりながら読解を深めていくような作業を試みたのである。

#### 4-2 授業の進め方

この授業では、3～4回をひとまとまりとし、第1回には、教師が用意した文章をクラス全体で読解し、目標を理解する。その目標に合わせた文章を、個人または、グループごとに探し、第2回に発表する。第3回には、学生が持ち寄った文章の中からいくつか、または関連する文章をクラス全体で読解するという流れで進行させた。

ユニット	読解の目標	中心とする記事のジャンル
1	比較の際の着眼点を確認する	事件記事
2	データ分析のしかたを比較する	調査報告
3	出来事の取り上げ方を比較する	事件とコラム
4	新聞各社の意見を比較する	社説

教材は、インターネット上に配信されるニュースを含めた新聞記事を中心とし、学期前半は、同じ出来事を取り上げた報道が、新聞各社によってどのように異なるのかを比較しながら読み、後半は、新聞社間の比較と同時に、ある事件が、事件として報道されている記事と、その事件を踏まえて書かれたコラムでは、書き方にどのような差異が生じるのかも比較考察した。

今期に取り上げた話題には、京都迎賓館の開館のような非常にタイムリーな

ものから、一連の反日デモをめぐる報道を筆頭にした国際、政治問題、インターネット社会のあり方や、男女共同参画社会に対する考え方など、新聞紙上で意見が交わされることの多い社会問題など多岐に渡った。学生が持ち寄る文章には、出典もジャンルも制限を設けなかったが、教師が与える文章は、極力、内容が偏らないように選定した。

#### 4-3 着眼点を見出すための初回の授業

日頃、1つの出来事について、複数の新聞記事を比較して読むということのない学生は、比較するといっても、そもそも、どこをどのように読み比べるべきかという観点が曖昧である。そこで、最初のユニットでは、比較の際の着眼点、すなわち、どのような点に着目すれば、内容理解を深めることにつながるか、という視点を、学習者各人に見出させることに主眼を置いた。

教材としては、新幹線が、本来停車しない駅で臨時停車したという事件報道を取り上げることにした。17名のクラスでの作業のため、基になる記事を1つ決め、グループに分かれて、それとどのような相違があるかを分析するという方法をとった。

初発問の投げ方に迷ったのだが、教師の誘導なしに、学生がどの程度分析できるのかを見るため、全く何の示唆も与えず、ただ、基とする記事と「違う点」を探すように指示した。すると学生の指摘する「違う点」は、予想したように、A紙にはこのことが記述されているが、B紙にはないといった、何が書いてあって、何が書いてないかということに終始してしまった。

そこで、次に、見出しのみに注目して、使用されている言葉を比較し、違いを挙げるように指示を出した。以下に、各社の見出しを挙げる。この事件の報道について、基にしたのは「共同通信」の記事である。

「共同通信」東北新幹線が“温情停車” 乗り間違えた受験生救う

「産経新聞」一人の受験生のため…新幹線が“温情停車”

「河北新報」東北新幹線 受験生、停車駅勘違いで“温情停車”

「讀賣新聞」東北新幹線、宇都宮駅に“温情”停車…受験生乗り違え

「朝日新聞」乗り越し受験生に配慮、新幹線が宇都宮駅に臨時停車



「毎日新聞」〈東北新幹線〉受験生のため、本来止まらない宇都宮駅で停車

共同通信社以下、4紙が「温情停車」という表現を使用している中で、「朝日」「毎日」は、この「温情」という表現を用いずに、「臨時停車」単に「停車」としている。このように見出しのみに絞って見比べさせた結果、用語の相違に気づき、さらに突っ込んで、各社の見出しを分析することができた。

「産経」を担当したグループは、「共同通信」が「受験生を救う」として、東北新幹線を英雄視しているような感じさえするのに対し、「産経」は「一人の受験生」というところが強調されていると指摘し、そこから、ある学生は、たった一人のために、周囲全体が協力したという暖かさのようなものを感じさせるという意見を述べ、ある学生は、一人のために全体がいわば犠牲となるような措置に疑問を投げているのではないかという考えを示した。また、「朝日」を担当したグループは「配慮」という言葉に着目し、東北新幹線が、乗客に気を配っていることが感じられると述べた。これらに対し、「毎日」を担当したグループからは、「本来止まらない宇都宮駅で停車」というのは、今回の措置が非常に特例的なものであったことを強調するもので、他社が、東北新幹線の措置を肯定的に捉え、そこに思いやりの精神を見て賞賛を込めているのに対し、毎日は、今回の出来事が、本来はあってはならないことであったはずだという姿勢に立っているのではないかという意見が出された。

この見出しの比較を切り口として、記事本文を読んでもみると、以下の3紙の表現が、それぞれの態度の違いを端的に表現しているものとして挙げられた。

「共同通信」(注3)

JR東日本の東北新幹線が2日、大学入試に向かう途中で列車を乗り違えた受験生のため、本来は止まらない宇都宮駅で停車したことが3日、分かった。

「毎日新聞」

JR東日本が2日、大学入試会場に行く途中で東北新幹線の列車に乗り違えた福島市の男子受験生のために、本来止まらない宇都宮駅で停車させていた。

## 「朝日新聞」

大学の入学試験を受けるため福島県郡山市に向かっていた福島市の高校3年の男子生徒が2日、郡山駅を通過する東北新幹線の列車に誤って乗ったが、JR東日本のはからいで、通過駅の宇都宮駅で臨時停車してもらい、列車を乗り換えて試験に間に合っていたことが分かった。

実は、多くの事件記事の中から、この新幹線の臨時停車を教材として選んだのは、初級段階で学習する使役形（「停車させる」）と、「てもらおう」という補助動詞の用い方に、それぞれの文章の筆者の姿勢が顕著に感じられると判断したからである。が、学習者が、独自にそれに気づくかどうかは疑問だった。事実、最初、6紙の記事を配布し、何の手がかりも与えずに、際立った違いはないかを問うた段階では、十分な時間をとらなかったという理由もあったと思うが、学生自身は、これらの相違に無反応であった。ところが、見出しを比較した後では、言葉の使い方を意識して丹念に読んでいった結果、この違いに気づくことができた。学生からは、同じ事件でありながらも、こんなに書き方が異なるのだということに対して、驚きとも感動ともつかない声が漏れた。

## 4-5 以降の授業

紙面の都合で、以降の授業についての具体的に報告できないのが残念だが、最初のこの授業で、どのような点に着目して比較していくと、筆者の視点や立場であるとか、事件、あるいは事件の当事者に対する思いのようなものが汲み取れるということを、聡明な学生達は理解し、以降の読解に生かしていくことができた。

一例として、期末試験の答案に触れておく。期末試験では、東京都議選の結果を報道した記事の比較を出題したが（注4）、「自民後退50議席割る（朝日新聞）」「自民後退48議席（毎日新聞）」「自民【50】届かず（読賣新聞）」という見出しの表現について、ある学生は朝日と読賣の「割る」「届かず」という動詞を比較し、ある学生は朝日、毎日が「後退」という語を用いているのに対して、読賣はその語を用いていないという点に注目し、それぞれの

記事に用いられている表現から、自民党に対するどのような意識が感じられるかについて考察していた。

相違点の発見というのは、ゲーム感覚で取り組めるため、学生は文章に集中でき、速読の訓練にもつながったと考えられる。

#### 4-6 授業に対する学生からの評価

15名ほどのクラスで統計をとっても、数値の信憑性はなきに等しいと思われるので、学生の感想を抜粋して紹介するにとどめる。

多かった意見は、これまで、同じ内容について書かれた複数の文章を比較して読むということを体験したことがなかったので、非常に興味深かったというものである。さらに、この授業の方法を通して、「どの言葉が重要なのかを考えながら読めるようになった」「言葉のニュアンスの違いを意識して読めるようになった」といった意見も多かった。また、新聞そのものに対しても「同じ内容を扱っていながら、各社の訴えたいことが同じだとは言い切れないということがわかった」という意見もあり、学生が、各自で新聞を読む場合にも、それまでとは違った角度で記事を読めるようになったと考えている。「言葉から主旨にたどり着き、言葉に注目しながら社説を読むのは非常におもしろい」という感想は、この授業の目的が非常によく理解できた意見であると思われる。

### 5. まとめ

新しい文法項目や新出語を導入している際、「目下、学習している事項は、既習の何々と同じ意味か」といった質問がしばしばなされる。我々が、新しい知識に触れたとき、既に自分が身につけていることと照らし合わせて理解しようとするのは自然な方法である。だが、外国語を学ぶ際、出会った言葉をいちいち母語に置き換えて捉えようとする、その変換の過程で削り取られてしまう部分があまりにも大きい。

外国語で書かれた文章に盛り込まれている情報を、事柄として捉えようとする場合、最も簡便な方法は、母語に翻訳して理解することであろう。だが、そうすることによって、原語のもつ意味、原語ならではの味わいというもの

は削がれてしまう。「読解」の授業の中で、〈何が〉書かれているのかを、まず、きちんと把握できるようになることは必要なことではあるものの、〈何〉に比重を置きすぎると、言葉が見えなくなってしまう。

学習者が、外国語をそのままに受け入れようとすることは、非常に手間のかかる、時としてストレスにもなりかねない作業である。だが、〈何〉ではなく、〈どう〉書かれているのかを分析するという作業は、内容把握をさまざまたげるものではけっしてないし、外国語を学習するという意味では達成感の大きい作業でもある。「ここにこのように書かれているから」あるいは「この言葉が使われているから」、「このようなことが言える」という、書かれ方を根拠として踏まえ、内容を読み解くという作業を繰り返していけば、必然的に、速読力も増し、読解に対する興味も広がる。

複数の文章を比較しながら読むという方法にさらに改良を重ね、新しい読解の方向性を確立したい。

## 注

- (1) 実際、中級レベルのクラスでは、しばしば、「現在、『総合』の授業で扱っているような表現は一体いつ使えるのか」、「実生活で〈役に立つ〉ような表現を教えてください」といった要求が出されるようだが、上級レベルで、新聞記事などに使用されている語彙や文型を学習した学生は、たとえ今すぐ使用する機会のない表現であっても、そのレベルの表現が日本語の中に占めている比重が少なくないことを知り、積極的に学ぼうとする意欲を示すようになる。
- (2) 同大別科の上級クラスでは、そうした日本語を「洗練された上品な日本語」と、一種の標語化して呼んでいる。
- (3) その他、「読賣」「産経」は「共同通信」と同様の「停止した」という表現を用い、「河北新報」が「毎日」と同様の「停車させた」という使役形を用いていた。
- (4) 期末試験に出題した文章は、あらかじめ配布はしておいたが、授業で内容について触れることはせず、教師側からのコメントもしなかった。

## 引用文献

- 小出慶一著 神谷京子・渋谷妃生子編集協力（1993）『日本語を学ぶ人たちのための日本語を楽しく読む本・中上級』凡人社
- 三浦昭監修 岡まゆみ著（1998）『中・上級者のための速読の日本語』The Japan Times
- 柿倉侑子・鈴木理子・三上京子・山形美保子（2000）『日本語上級読解』アルク